特241
625

今上陛下御日常の一端

鈴木貫太郎謹述

始

特241
625

帝國圖書館藏

今上陛下御日常の一端

樞密院副議長
海軍大將　鈴木貫太郎謹述

日本文化協會

昭和十五年十二月
帝國圖書館藏

本書は樞密院副議長海軍大將男爵鈴木貫太郎閣下が文部省教學局の委囑により謹述せるものである。本協會は特に乞ふて教學叢書第九輯より複刷の許を得之を會員諸彦に頒ち宏大なる御聖德を仰ぎ奉らんとする次第である。

昭和十五年十二月

日本文化協會

今上陛下御日常の一端

教學局の御依頼により　今上陛下御日常の御一端について謹述致します。私は昭和四年の初から昭和十一年の末まで八年間侍從長として　今上陛下の側近に奉仕してをりました。その關係上御聖德について御話申し上げますことは自分として甚だ恐懼に堪へませぬので、滅多に御話を致してをりませぬ。ところが、この二三年前から內務省の關係の御依頼がありましたので、已むを得ず二三度講演を致したことがあります。今回また教學局からの御懇請がありましたので茲に謹述致す次第であります。

そこで先づ御紹介申し上げたいことは、昨年の六月に雜誌「婦人之友」に掲載された宮內省帝室會計審査局長宮木下道雄君が昨年四月自由學園の天長節奉祝式場で講演せられた「軍艦榛名後甲板上に拜す聖なる一瞬の光景」と申す題の御話でありますが、これ

は御聖德を拜しますのに洵に好い材料でありますから、今その全文を玆で御紹介申し上げたいと思ひます。木下君は、今上陛下が東宮にておはす大正十三年東宮侍從となり、陛下御卽位後の昭和四年まで侍從を勤められ、本文の昭和六年には行幸事務を主管する宮內大臣官房總務課長の任にあつたのであります。その御話をこれから御紹介申し上げます。

本日天長節奉祝の嚴肅なる式にお招きに預り、陛下御左右の御事につきまして、私の拜し得ましたことの一端をお話する機會を得ましたことを光榮に存じます。私は陛下の御民の一人として、この時代に生きることの譬へがたき喜びを實例を擧げて皆樣とともに頒ちたいと思ひます。話は拙いのですけれども、どうか意のあるところをおさとり下さつて、ほんたうにこの大御代に生きる喜びと想ひとを深くし、各〻その業に勵む決心を一層堅めらるゝならば、これこそ天長節に當り、私共から陛下に差上ぐる何よりの御慶びの印でありませう。

只今からお話することは私が他人から傳へ承つたことではなく、私が現にこの眼で偶然拜しました一つの聖なる光景、それは鹿兒島灣上夕闇に包まれた軍艦榛名後甲板上、あたりに人なく聲なき一瞬の光景についてでありまして、私は我が日の本のおのづからなる姿を、この時ほどありありと眺めたことはないのであります。

お話の本筋に入るに先だち、私は一つの隨筆を皆樣に御紹介して置かなければなりません。

私の同窓に三宅正太郎といふ方があります。今大審院判事をしてをられる人でありますが、その人が昨年一つの隨筆ものを出版されました。その本の中に「宮城前」といふ一篇があります。その內容はと申しますと、ドイツ東プロイセンの或る裁判所に昔勤めてゐた一人の老判事が、昨年旅行の途中日本に立ち寄り、一日舊友の三宅君を訪ねました。或る日二人は相携へて宮城奉拜に出掛けたのでありますが、丁度事變中のことであり、宮城前の廣場には、風にひらめく日の丸の旗、鳴り響く勇ましいラッパの音、多勢の人が雜沓し、出征の若い人たちは親兄弟や友人に圍まれ

て、おごそかに頭を垂れ、宮城を拜し、心からのお別れを　陛下に申し上げてゐる。その雜沓の中で、三宅君達二人は一生の中でも滅多に遭遇することのないやうな感激に胸を打たれて、この眞劍な場面を眺めてをつたのですが、ふと見ると群集を少し離れた所に三人連れの親子が祈つてをります。出征する兄とその妹と父親の三人、今しがた田舍から東京驛についたのでありませう。旅の荷物を傍らに置き、遠慮勝ちにお濠の玉垣の側近くへ寄つて一心に祈つてをるところです。この光景を先程からだまつてヂット觀てをつたドイツの老判事は、聲をのんで、そつと三宅君に尋ねました。

「皇帝陛下はあの城の窓からこの光景を御覽になつてをらるゝのか」

と。お濠の向ふに聳える白壁の櫓の窓を見上げて、かう尋ねました。察するところ老判事は、民衆のかくまで敬虔な態度は、　陛下が御覽になつておいでになる前でなければ見られる譯がないといふ考へが浮かんだのでありませう。その瞬間に三宅君の頭に閃いたことは、眼を瞋らせ腕をふるつて民衆の前に獅子吼する獨裁者の姿

でした。又さうしなくては國民の心をとらへることの出來ない國と、我が日本の國體との著しい相違でありました。三宅君は決然として「否」と答へながら、世に又と比類なき我が國體の有難さに感泣して、再び謹んで宮城を拜したと、かういふ話の一篇であります。

陛下が御覽になつておいでにならうが、御覽になつておいでになるまいが、日本國民の忠誠には變りはない、それが日本の國體の尊いところであるといふのが、「宮城前」の骨子であると思ひます。

私がこれからお話いたす事柄は三宅君の「宮城前」に對する應答とお考へ下さつてよろしいのです。三宅君にお會ひいたしたならば、是非このお話をしたいと思つてをりますが、未だその機會がなく、皆樣に先にお話することになつてしまひました。

昭和六年の秋のことでありますが、熊本に於て陸軍特別大演習が　陛下御統監の下に行はれまして、私も供奉の一員としてお供いたしてまゐりました。大演習終了

後、　陛下には鹿兒島市に行幸あらせられ、御歸りはそこから軍艦榛名で海路を横須賀港へと向はせられました。

十一月十九日、御乘艦時刻は午後の四時過ぎ、御召艦は日沒とともに錨を上げ、縣民の熱誠なる奉送裡に櫻島を後に鹿兒島灣を靜々と南下して行きます。間もなく夕食の時刻がまゐりましたので、私共供奉員一同は食事を致してをりましたが、私は海上の様子が氣に懸りましたので、早く食事を濟ませて皆より先に後甲板に馳せ上りました。

後甲板と申しますのは、軍艦旗の立つてをる後方の甲板で、かなり廣く、大きな大砲の備へ付けてあるあの甲板をいふのです。榛名では最後方の司令長官室が陛下の御座所に當てられてをりまして、それは後甲板の眞下に位置してをりますが、司令長官室からは後甲板へ專用の階段が通じてをりますので、　陛下には何時でも隨時御自由に後甲板にお出ましが出來るやうになつてをりました。後甲板には御乘艦中と雖も何等特別の裝飾はなく、一個の海圖の机と數個の脚付の望遠鏡と簡單な

椅子が五六脚あるのみでありますが、　陛下はこの後甲板が殊の外お好きで、御用のおありにならない限りはと申し上げてもよろしい位、いつもこゝにお出まし遊ばされます。

さて、お話が前に戻りまして、後甲板へと急いだ私は、　陛下はまだ御食事を御濟ませ遊ばされぬであらうと思ひながら、別の階段を馳せ上つたのです。もはや日はとつぷり暮れ、月はなく海上は眞暗で、甲板上には小さな電燈が只一つ灯つてゐるばかり、電燈の下ならとにかく、少し離れたら人の顏もよく判らぬ位の夕闇に甲板は包まれてをりました。

甲板には誰もまだ出てをらぬとばかり思ひ込んで馳せ上つた私は、思ひ掛けなくも間近な夕闇の中に只御一人　陛下の御後姿を拜したのであります。右舷の手摺り近くに海の方をお向きになつて直立遊ばされ、今し方望遠鏡から御手を離させられたかに拜し、畏くも御右手を擧げさせられ、何者にか御擧手御會釋の御姿であります。思はず私も　陛下の御覽遊ばされる方向を遙かに凝視致しましたが、夜闇の外

何も見えません。直ぐ私は側の望遠鏡に眼をあてました。時刻から推し測つて艦は未だ依然として鹿兒島灣内を南下してゐる筈です。そして艦の航路は灣の中央線に當りますから、左舷大隅の海岸にも右舷薩摩の海岸にも六哩位離れてゐる筈です。そんなことを考へてゐる中にだんだん眼が慣れてきて、レンズにうつる山々のぼんやりした姿をとらへることが出來ました。艦は今薩摩國指宿(いぶすき)の沖合の邊を航海してをるのでありませう。尙も眼を凝らして覗いてをりますと、その山々の下に海の色と陸の色との境に海岸線が見えるやうになりましたが、その海岸線一帶に赤い灯の流れが連綿として果しなく續くのが見えます。更に又少し小高い所に、何丁おきかに點々と海岸一帶連續して、大きな火のかたまりがぼうつと煙を上げてをるのが見えてきました。この時初めて私は萬事を了解したのであります。

遙かあの海岸地方に住む人達が、今頃は御召艦が自分達の村の沖合を御通過になるに相違ないと思つて、夜分艦影を拜することは出來ませんけれども、山山には篝火を焚き、老いも幼きも悉く海岸に立ち並び、手に手に提灯松火を振りかざして、

海上遙か　陛下在しますと思はるゝ方向を伏し拜んで、心からなる奉送迎を申し上げてをるのです。　陛下は今し方望遠鏡でこれをお察し遊ばされ、只御一人闇い海上の甲板の上から、遙かにこの村人達に御會釋を賜はるところであつたのであります。

彼方の海岸に立ち並ぶ無數の人々の中で、誰かこの有難き大御心を仰ぎ知るものがありませう。私は改めて軍艦榛名の山のやうな堂々たる姿を仰ぎ見かへしたのでありますが、海岸からはこの巨體も僅かに二つ三つの灯火としか見えないであらうと、眞に殘念に思ひました。あゝ何とかして　陛下の大御心を傳へる術はないものか、無線電信を打つても今篝火を焚いてゐるあの人達の耳にまで屆くのは恐らく明朝になりませう。そこで私はせめてもと思ひまして、艦長にお願ひして艦全部の探照燈に點火し、數條の光芒を以て左は大隅、右は薩摩の山や海岸一帶を隈なく撫で廻して貰つたことでありました。

これが軍艦榛名の後甲板上でゆくりなくも拜した眞に感銘深き一瞬の光景であり

ます。海上數浬を距てて陸から海へ、海から陸へ闇を貫く一筋の眞心の光。拜する者は期せず、　陛下御擧手の尊影。　陛下又御言葉もなく闇に向つて應へ給ふ。嗚呼何たる莊嚴な光景でありませう。

毎年今日私共は「光遍き君ケ代を」「恵遍き君ケ代を」と天長節の歌を唄ひますが、この歌の詞は決して決して唯の形容詞ではありません。私共は皆大君の御光を、また御恵を知らずしていたゞいてをるのであります。この事は日本國民たるものが常に心に銘してをらねばならないと存じます。

私は勤務上毎日宮城に參入致しますので、二重橋前に幾百千の國民が熱いお祈りを捧げてをる光景に屢〻接するのでありますが、その度毎に私の想ひは狂はんばかりに燃えて、過ぐる夜の鹿兒島灣上の聖なる光景を追つて行きます。

皆様は「國民は祈るもの、　陛下は祈られ給ふ御方」と輕々しく思つてはなりません。日本國中、　陛下の御祈こそ最大最深のものと恐れながら申し上げなければなりません。遠き古の神代より天津日嗣の御位を代々繼々に受け繼がせられ、我が國治しめす日夜の御苦心は、只管祈りに祈り、祈りて止まぬ御生活とならざるを得ないものと、恐れながら拜察致します。殊に今日の如く內外の情勢が容易ならぬ時代にありましては尙更のことです。

國の爲、民の爲一刻たりとも大御心を休め給ふ御時なき　陛下に、せめて今日の天長節の日にでも、ほんたうにごゆつくりと御休息を御願ひ致したいものです。しかしどうすれば私共のこの願はかなふでせうか。どうすれば大御心を安んじ奉ることが出來るでありませうか。その方法は唯一つ。私共國民が一人殘らず正しく逞しい人間となり、　陛下が一番御心配遊ばさるゝ方面を自ら進んで擔當し、挺身奮鬪各〻その業に邁進して「私共がをりますから　陛下どうぞ御安心下さいませ」と申し上げることが出來るやうにするより外に途はないのです。この奮鬪こそ、最大最深の　陛下の御祈に添ひ奉る私共の祈に外ならないのでありませう。

天長節のこの佳き日に當り、軍艦榛名後甲板上の光景を皆様にお傳へ致しますと共に、自ら省みて私共が　陛下の御民として　陛下に御誕生日の御祝ひの詞を申し

上ぐる資格がほんたうにあるか、ないかについて、お互に眞劍に考へなければならないと思つてをります。

これが木下君が御話になりました全文であります。夕闇の中に國民は至誠を以て陛下を奉迎送し奉り、又　陛下は至誠を以て御會釋を賜はつたこの美しき聖なる光景のうちに、眞に神ながらの道は實現せられてゐるやうに存ずるのであります。丁度この時私も　陛下に扈從致して榛名にをつたのでありますが、夕食の漸く終つた頃、探照燈の報告を受けましたので、早速後甲板に出て見ましたところ、丁度木下君が述べられた通り、榛名の探照燈は全力を擧げて、大御心の通ふ光を、空に山に又海に、四方八方あますところなく貫き放つてをります。供奉員一同この光景を拜しまして、深く　陛下の大御心に感激致した次第であります。この一事を以てしても御聖德の全體を拜することが出來るのではないかと思ひますので、特に茲に御紹介申し上げた次第であります。

これから　今上陛下の御日常はどうあらせられるかといふことを申し上げたいと思ひ

ます。

陛下は御奥に於て毎朝御食事前に必ず御朝拜あらせられ、伊勢神宮を始めとし御歴代の皇靈竝びに天神地祇に御祈念遊ばされるとともに、宮中三殿卽ち賢所・皇靈殿・神殿に侍從を御代拜として差向けられるのであります。御食事後に大抵新聞を御覽になるのでありますが、その新聞は東京・大阪は勿論、他の地方の大きな新聞にも及び、廣く御覽遊ばされます。新聞については世の中に誤解があるやうで、切拔を差上げるのではないかといふことを時々質問されることがありますが、決してさういふことはありません。重要な内外の諸問題はよく御目を御通しになりまして毎日拜謁の時にも「今日はかういふことがあつたが」と御尋ねを蒙ることが再々でありますが、私共の方が却つて未だ見てをりませんので恐懼致すことも度々でありました。九時半頃に表御座所の方に御出ましになりますが、その時に侍從長・侍從武官長・皇后宮大夫などに謁を賜はるのであります。それから正午まで御政務その他定例の御用を行はせられ、正午には一旦御奥へ入

御あらせられまして、又一時頃から表御座所に御出ましになつて御政務を聴はせられるのであります。定例の御用と申しますのは、從來私共奉仕中は御日課を定めておいでになりまして、殆ど午前中はその御日課で滿たされてをつたのでありますが、只今は餘程變つておいでになるだらうと思ひます。それにしましても、水曜日は樞密院會議の定例日になつてをりまして、本會議は宮中に於て開かれるのでありますが、この會議には必ず臨御になつて御前會議が行はれるのであります。本會議のない時でも顧問官にはこの日に謁を賜はります。木曜日の午前は定例の一般拜謁の日になつてをりますが、拜謁も近年なかなか澤山になりまして、一年を通ずるならば謁を賜はる者の員數は凡そ三四千の多きに達するのではないかと思ひます。それに外國人の謁見を願ふことも相當に多いのであります。右の外軍事について或は外交について、御研究の爲に時を定めて御進講を聽し召されます。軍事上のことは軍令部次長・參謀次長が交代に一週おきに一回御進講申し上げるのであります。それから外交の方は松田道一博士が御進講申し上げてをります。この方は御承知の通り元在外の大使をしてをられた方であります。御運動は大抵

午後の二時から四時頃までの間に遊ばされます。從來御運動は御乘馬とゴルフを隔日位に行はせられたのでありますけれども、この事變以來ゴルフは全く遊ばされぬやうに承つてをります。御乘馬は御差支のなき限り勉めて行はせられますが、それも現在御政務がいろいろ御忙しい爲に充分には御出來にならぬのではないかと、私かに恐懼の至に感じて居る次第であります。雨が降る時の爲には覆ひ馬場がありますので、そこでやはり御乘馬の御運動を遊ばされるのであります。御運動はすべて宮城内だけのことでありますが、併し吹上御苑の方から元の本丸跡にかけて相當の場所があり、障碍物等も設けてありますので、その内を駈足で御馬を御進め遊ばされるやうなことも相當御出來になる餘地があるのであります。御運動後は御入浴の上、再び表御座所に於て、各方面からの上奏書類を御允裁あらせられ、夕刻六時頃御奥へ入御遊ばされるのを常としますけれども、國務御多端の今日に於ては恐らくこの御常例を破つておいでになるのではないか、又御夕餐後御寛ぎの御時間にも屢〻再び表御座所に出御遊ばされるのではないかと拜察致し、寔に恐懼に堪へぬ次第でございます。

それから御政務のことでありますが、先づ書類について申し上げますと、内閣・軍部或は宮内省その他から奉呈する書類が隨分澤山あるのであります。午前の内は少うございますが、これ等は午後一時から二時までの間に御濟ませになります。午後はなかなか多く出て參りますが、これは五時から六時の間に御處理遊ばされるのであります。尤も緊急な書類につきましては、豫てから御沙汰を拜して居りますので、これは時を選ばず奉呈、御親裁を仰ぐことになつてをります。何れも書類は迅速に御點檢になられまして、重要な書類はよく御覽遊ばされ、その上で御裁可になるものは御裁可の御印を御捺しになり、又御署名を仰ぐものには御署名遊ばされるのであります。皆これは御自身で遊ばされ、決して他に御命じになることはありません。このやうに御執務は洵に御嚴格であらせられるのでありまして、大權を御總攬遊ばされる思召の明確なることがこれによつても拜察されるのであります。これらの書類は年に少くも五六千通はあるだらうと思ひます。それだけを御處理遊ばされますのは御容易なことではないと拜察するのでありますが、併し　陛下は攝政宮御時代から今日までずつと御政務を御執り遊ばされておいで

になりますから、御處理はなかなか御速いのであります。併しながら書類が澤山奉呈されました場合には六時から七時過ぎまでも御掛り遊ばされることが珍しくありません。それが御濟みにならなければ、決して御奥へ御入り遊ばされるといふことはございません。隨つて御食事等も御遲れになるやうな次第でありまして、さういふ場合には洵に側近者は恐懼致す次第であります。

御政務と申しましても、事柄に現れて參りますことは、拜謁であるとか、又たゞの拜謁のみならず拜謁の上にいろいろ奏上申し上げる、或は文書によつて上奏しそれによつて御裁可を仰ぐ、又いろいろの報告を奉呈する、或は又親任式・親補式とか、御前會議とか、いろいろな形式になるのであります。この事について側近はどういふ徑路で御取扱ひ致すかと申しますと、これは侍從職と侍從武官府との二つによつて御取次を申し上げてをるのであります。侍從職で取扱つてゐることは一般の政務に關係する方でありますから、内閣或は各省から來る書類、或は拜謁のことも取扱ひ、又樞密院・内大臣府・宮内省・會計檢査院或は貴衆兩院等から來るいろいろの書類等、これは皆侍從職で取扱

つてをります。それを侍從長が一々御取次いたしてをるのであります。それから軍務、卽ち陸軍省或は海軍省・參謀本部・軍令部・教育總監部・各軍隊の司令部から參ります事柄は侍從武官府の方で取扱つてをるのでありまして、侍從武官長が御取次申し上げることになつてをります。この區別は洵に嚴格になつてをりまして、軍事關係のものを侍從職で取扱つたり、或は又軍事以外のものを武官府で取扱ふことは決してないのであります。　陛下には國務の御進行につきましては常に迅速に御取扱ひ遊ばされますことを御努めになります。例へば大臣とか參謀總長・軍令部總長の拜謁願出があれば早速に御許しがありまして、時によると御運動を御取止めになられまして謁を賜はるといふことも再々あるのであります。今日のやうな時局下に於きましては緊急な上奏や重要な報告を申し上げることが相當にあるのでありますが、さういふことにつきましては、いつでもよいから直ぐ上奏・報告せよとのかねがねの御沙汰がありますので、時によると夜中でも上奏や報告を申し上げることが屢〻あるのであります。又親任式等についても同樣でありまして、これもその必要に應じて出來るだけ迅速に御處理遊ばされる思召であら

せられますから、或場合には夜の二時に親任式を行はせられた例もあるのであります。さういふ風に　陛下は非常に御眞劍で、重大なことは時を移さずに御實行になります。これは洵に恐懼感激に堪へない次第であります。平常の御政務の御取扱の御模樣を拜察致しますと、　陛下は大抵のことはその日起つたことはその日に御處理遊ばされます思召に、どうも拜するのであります。その爲に隨分遲くまでも御執務あらせられるのであります。たゞ場合によつて各省から提出された書類の中に御疑問があらせられ、それについて御下問をいたゞいたり致します。その場合にはその事柄のはつきり致しますまで御留置きのことも再々ありますが、大抵はもうその日の中に御處理遊ばされるのであります。

次に申し上げたいことは、宮中の御祭典のことであります。　陛下に於かせられては御祭典のことは非常に御鄭重に遊ばされます。これは敬神崇祖の範を國民に垂れさせられることは勿論でありますが、殊に皇祖皇宗から御繼承になりましたこの國家を常に立派に御統治あらせられるといふことについては非常に御熱心な思召が拜せられるのであ

りまして、御祭典に際しての特に敬虔な御態度を咫尺の間に拜しましては感激の外言葉もない次第であります。

宮中の大祭は申すに及ばず小祭と雖も御祭のことは皆　陛下御親ら遊ばされるのであります。小祭とは歳旦祭とか、或は祈年祭、賢所の御神樂とか、或は御歴代の式年祭、例祭といふやうないろいろの御祭を申すのであります。又その他に旬祭と申しまして、毎月一日・十一日・二十一日と一の日に御祭があります。これは常に御親拜あらせられ、而も大抵朝早く御親拜遊ばされるのであります。さういふ譯で、一年の中には六十回位の御祭典があるのでありますが、悉く御親拜あらせられるのであります。斯くの如く御祭典のことにつきまして少しの御緩みなく洵に御嚴格に御實行あらせられるのを拜しましても、如何に　陛下が日夜國家の安泰と臣民の幸福とを御祈りあらせられるか、大御心のほど恐れながら拜察するに餘りあるのでありまして、ほんたうに日本は神國なりといふ感激が湧くのであります。

次に行幸のことについて申し上げますが、數多き行幸の中でも陸海軍特別大演習の行

幸及び地方の行幸、これ等が一番規模の大きな年中行事と考へられます。この行幸に御供を致しまして、その間に感じますことは、如何にも御日程が繁く、隨分朝早くから遲くまで御行動遊ばされるのであります。さぞ御疲れ遊ばすであらうかと常に御心配申し上げるのでありますが、併し　陛下には御元氣旺盛であらせられまして、その爲に別段御障りのあつたこともありませんでしたが、何と申しましても、御日程が餘り激しすぎますので、時によるともう少し緩やかな御日程に變更した方がと存じ上げまして思召を御伺ひ致すこともあるのでありますが、　陛下はやはり國民の希望について思召が眞に御深くあらせられ、一旦御決めになりますと、隨分困難な御日程でもそれを御敢行遊ばされるのであります。それ等の例を茲に一二申し上げますならば、昭和七年の大阪の大演習の時、丁度その前日まで多少御風邪氣味でいらせられました爲に、野外統監部への行幸も御控へあらせられ第四師團司令部内の大本營に於て御統監遊ばされてをりましたが、觀兵式の朝になつて見ますと、折惡しく雨風は烈しく、侍醫あたりも御風邪が御再發になつてはと非常に御心配申し上げたのでありますが、　陛下は「いや大丈夫だから」

と觀兵式場に行幸を仰出され、さうして尙「兵は旣に整列してゐるではないか」と、そのまゝ御出まし遊ばされたのであります。私もこの際御供を致してをりまして、侍醫がさう申すものでありますから心配致しまして、朝御伺ひ申しますと、どうも御自信が非常におありになるやうな御樣子を拜見致しましたので御出馬を願つた次第であります。この時風は凄じく雨もなかなか强く降つてをりましたので、御外套だけは召されましたが御頭巾は御用ひにならない。さうして御帽子から盛に雨が滴るやうな次第でありましたが、一向それにも御構ひなく觀兵式を御濟ましになりました。私はその時にもなぜ御頭巾を御用ひにならぬのであらうかと拜察致しますと、兵が皆かぶつてをらぬのに御自身一人御頭巾を用ひさせられることは忍びないといふ思召であらせられたやうに拜したのであります。併し果してこの時には寧ろ御元氣で、御風邪もどこかへ吹飛んでしまつたやうに、少しの御障りもなく行幸を終へさせられたのであります。又昭和十一年北海道の大演習の場合にもやはり雨が大分降りましたが、その時にも御外套は御用ひになられましたけれども、やはり御頭巾は御用ひなく雨の降る所に御出ましになりまして、い

ろいろ戰況を御展望になられました。侍從から天幕の中に御入りを願つても一向御構ひもなく、一番展望の良いところに御出ましになつて演習を御統監遊ばされました。丁度その時に參謀總長が御報告に參られましたが、やはり雨の中で御報告を御聽きになられたやうな次第でありました。又先年宮城前で青年學生を御親閲になられたことがございましたが、丁度その時小雨が降り風もあつて頗る寒い日でありましたので、宮城前に御出ましになりました時に侍從が御後からマントを差上げましたところ、壇上の玉座に御立ちになるや否やこれをおぬぎ捨てになり、そのまゝ一時間二十分の長さにわたり分列部隊の敬禮を風雨の中で御受け遊ばされたことがありました。それもやはり學生が皆外套もかぶらずそのまゝで行進をするので、やはり御自身だけマントを用ひさせられることは忍びないといふ思召であらせられたのであらうと拜察するのであります。それからこの地方行幸の時毎に、學生・在鄕軍人その他地方青年團體の御親閲がありますが、これ等はいづれも數萬の大人數であり式の時間は三十分から一時間もかゝるのでありますが、その間直立不動の御姿勢で敬禮を御受けになるのであります。洵にこの時の御樣子

は長れ多い限りでございまして、少しも御足を御くづしになりませぬ。御くづしにならぬといふよりも殆ど御微動だもなさらぬのであります。これは私共も相當軍隊にをりまして訓練されてゐるのでありますが、なかなか長い時間微動もせずにをるといふことは容易なことではないのであります。これ等によつても御修養の程が拜察せられるのであります。或地方では非常に感激致しまして、御足跡の型を作つて御記念にしたいと願ひ出たこともあつたといふことであります。　陛下が御立ちになつた御跡は、白い布のところに初めに御置きになつた御足跡そのまゝ一分も動いてをりません。つまり一べん御立ちになつたらほんたうの直立不動の御姿勢でいらつしやるのであります。大抵の將軍でも幾らか足を少しづつ動かしてゐる位でなかなか御眞似は出來ませぬ。また、行幸の際に特に感激致しますことは、成るべく地方民の希望は叶へさせ給ふ思召であらせられ又傷兵や老人を御勞りになる御樣子を如何なる場合にも絶えず拜する事であります。

次に御學問と御修養のことについて申し上げたいと思ひます。　陛下には御承知の通り御幼少の時代は學習院の初等科を御卒業になり、それから中等科に御進みになりましたが、その中に御學問所が出來ましたので、その方に御移り遊ばされたのであります。そこで中等科の御教育、又高等科に相當する御教育を受けさせられました。それから更に大學の御課程といふやうに、やはり普通の學級的の御學問を御修め遊ばされたのであります。併し御學問所の方針で他の學問と違ふところは、特に天皇としての御修養に重きを置かせられた事であります。　陛下の御修め遊ばされました事柄を拜察致しますと、御學問所時代のそれだけではありません。御學問所が閉鎖されました後に於ても、攝政宮殿下の御時代、更に御即位後まで、この御學問の方面はずつと連續して御學びになつておいでになるのであります。それでありますから、政治學・法律學・經濟學などといふやうなものは、皆それぞれ斯界の泰斗が御指導申し上げたのであります。それから古典とか、四書五經といふやうな方面をも、いろいろ御進講申し上げてをるのであります。御學問のことについては隨分長い間各種の學科を御修めになつておいでになります。その中で私の拜察するところによりますと、　陛下は地理と歴史に御詳しいのであります。　陛下が生物學について深い御造詣のあらせられますことは、一般に知られたことであり

ますが、地理と歴史に御明るいことは餘り傳はつてをりません。　陛下は一體御言葉の御少い方でありますから、どういふことを御承知あらせられるのか傍からはなかなか窺ひ知ることが出來ないのでありますが、御平常の事柄について時々思召を拜しますと、その御話の中に如何にも歴史上のことについて御明確なる御意見を承ることがあります。それで　陛下には大變歴史に御明るくあらせられるといふことを氣付きましたので、或時歴史はどういふやうにして御學び遊ばされましたかといふことを御伺ひ申し上げましたところ、陛下の仰せられますのには、歴史は白鳥博士が御進講申し上げた。なほ箕作博士の著書は全部見たと仰せられたのであります。それを承りまして、成程歴史に御精通でいらせられる御筈たと、その時初めて　陛下の歴史に御明るいことを承知致したのであります。御承知の通り箕作博士の著書は非常に多く、殊に國家興亡の歴史については道德的な見地からよく批判されてゐるのであります。それから明治天皇の御傳記は編纂される度に御手許に奉呈して御覽を願つたのでありますが、これは四五十枚づつ書列ねたものが二百何十冊かあるのでありまして、これを一々御覽願つたのでありま

す。さういふことからでも明治時代の歴史は實によく御承知あらせられるのであります。歴史の御詳しいことについて以前奉仕の人に尋ねて見ますと、丁度　陛下が御青年時代――中學の程度から高等科程度の御時代に非常に歴史が御好きだつたと申すことであります。それでいろいろの歴史的の書物・雜誌なども御覽遊ばされたといふことであります。或人の話に、箕作博士の著作が出來たといふことを聞し召されて、一冊御取寄せ遊ばされ、朝から夜通し御讀みになつて、何でも夜二時頃まで到頭一ぺんに御讀了遊ばされたといふことであります。非常に歴史に御明るいことがさういふことでも解るかと存ずるのであります。殊に歴史の方面から見ますと、世界各國の興亡の跡、又その由つて來たる原因につきましても、實によく御承知であらせられることが拜察出來るのであります。この事は世の中には知られてをりませんけれども、側近に奉仕致しましてから初めて氣がつき、如何にも有難きことであると存じてをります。

次に生物學について申し上げます。生物學には　陛下は御小さい時から多少御趣味がおありなされたのではないかと拜察するのであります。御小さい時に御採集になつた動

物・植物の標本も只今大分そのまゝ御研究所の方に殘つてをります。それを拜見することが出來るのでありますが、さういふ譯で自然に生物學の御研究に御入り遊ばされたのではないかと思ふのであります。それで生物學の御研究は　陛下の御趣味の一つでありまして最も適當な御氣分轉換の方法ともならせられるのであります。平常非常に御繁忙な御政務の間に偶〻御研究所においでになつて、それで御氣分が轉換せられ一つの御慰安にならせられるのであります。たゞ滿洲事變發生以來御政務極めて御多端で御研究に成らせられることが極く稀とならせられましたことは洵に恐懼の次第でございます。

生物學の御研究のことに關聯致しまして、御田植のことでありますが、これは御研究所の中に一反歩ばかりの田畑がありまして、そこでいろいろの稻を御栽培になります。その稻の中には愛國であるとか、或は農林一號といふ種類の稻、又印度・泰國邊から取寄せられた稻もあります。つまり米の種子を御植ゑになつて御研究になつておいでになります。それによつてどれがよろしいか、又それ以上のものが出來はしないかといふことも御研究にならせられまして、いろいろその事が國民の幸福の上に役にたつのではな

いかといふ思召を拜するのであります。又御田植に於ては一面に於て日本傳來の農業の御奬勵といふ意味もおあり遊ばされるのではないかと思ひます。又國民の田植の困苦をも思召さるゝのではないかと拜するのであります。それから御收穫になつた米はそれぞれ神祇に御供へになります。いろいろな意味で御田植はこの非常に御忙しい今日の場合でもやはり御實行になつておいでになります。

それから又海上の生物學の御研究でありますが、葉山に御出ましになりますと、そこで海の中の非常に小さい微生物(プランクトン等)を御採集になります。その御研究に於てもそれがやはり漁業その他人間社會に將來有益な指針を與へるのであらうといふ思召を拜するのであります。この御採集も非常に御樂しみに遊ばされまして、葉山に御駐輦中御政務のあらせられないときは、午前は屢〻海上に御出ましになります。御出ましの時は、小さな御船に御召しになつて御出掛け遊ばされます。　陛下は御熱心にその小さい御船の中で而も炎天でさういふ御研究をなさつておいでになるのであります。これは御健康の爲にも非常に御宜しく、葉山に行幸遊ばされました年には御風邪も餘り召させ

られぬといふ次第でありまして、側近者は御健康の方面からも洵に有難いことと感激致してをる次第であります。それから　陛下には曾て、さういふ海上の小さい微生物の如きものを研究することは、なかなか普通の學者では出來ないから、幾らか學者の手助けにもなるであらうといふ思召を御洩らしになつたことがあります。御承知の通り、陛下には御煙草も召上らず、御酒も召上らぬのであります。御樂しみと申したならばただ生物學一つでありますが、これは洵に高尚な有難い御樂しみと拜する次第であります。

御修養のことについて一言申し上げたいと思ひます。　陛下には大變御熱心であらせられまして、曾て修養はどうすればよいか、德を修めることについてはどうすればよいかといふ御下問を拜したことも度々あるのであります。さういふ風に始終御修養のことについて御考へ遊ばされておいでになる次第でありますが、だんだん拜しますのに、結局御自分を反省して行く、己に克つて正しい道に進む、所謂孔子の克己復禮の外にはないのであるといふことを御自身で御自覺あらせられたのであります。さういふ思召によつて常に御熱心に御實行遊ばされるのでありますから、御聖德は彌が上にも益々廣大無邊に御進達になることと存ずるのでありまして、有難き極みであります。

それから御仁德のことについて申し上げたいと思ひます。御仁德と申しましても大きな事柄につきましては始終發表せられてをるところでありますから、茲にはさういふ大きな事柄は大略に止めまして、たゞ日常拜見致します御事實の二三を擧げて申し上げたいと思ひます。

陛下の御平常を拜しますに、所謂言行一致といふことを明瞭に拜察する次第であります。　陛下の賜はる勅語或は御沙汰は決して單なる文章ではないのであります。陛下御自身にそれを御實行になる熱烈なる思召を拜するのでありまして、常に國民の上に憐みを垂れさせられ、常に國民の幸福を御祈り遊ばされます。今日のやうな事變に於きましては、戰地に奮戰苦鬪してゐる軍人の上については特に御軫念あらせられまして、屢〻侍從武官を御慰問の爲に差遣はされ、又戰死者・傷病兵・遺族の上にも御勞りの恩澤を垂れさせられるのであります。曩には滿洲事變の時に多數の戰病死者がありましたが、厚き思召によつて顯忠府を建てさせられ、戰病死者の寫眞を御納めになり、さうし

て忠魂を慰めさせられることになつたのであります。元來寫眞は先の御府に於ては士官だけに限つてをりましたが、今回の顯忠府では兵に至るまで寫眞を御取寄せ遊ばされたのであります。又平時に於きましても天災とか大きな火災とか特別な出來事がありますと、窮民賑恤のことに對して御仁德を垂れさせられ、屢〻侍從を御差遣になつて御慰問又は御視察を賜はるのであります。これ等の顯著なる御仁德は新聞等にも現れてをるのでありますからこの位にして置きまして、平常細かいことで御仁德の二つ三つを申し上げます。

天候不順で旱が續く或は又その反對に霖雨が甚だしいとか風雨が激しいとかいふやうな具合でありますと、旱が過ぎるから田の植付が出來ないのではないか又暴風雨で水害がありはすまいかと御軫念になりまして、侍從に御命じになつて中央氣象臺に天候の調査を御問合せになることが屢〻であります。又これは葉山に行幸遊ばされました時でありますが、海上に御出ましになつて、その先に漁船等が釣をしてゐるのを御覽遊ばされ、それが丁度航路に當つてゐる場合などは、針路を變へるやうに仰せられまして、その漁

船を避けて迂回しておいでになるといふやうなことも再々あるのであります。それはどういふことかと申しますと、御通りになる前に警察の船が行つて漁船の位置を變へさせることがありますので、さういふことになるとこれ等の人々の生業を妨げて氣の毒だといふ思召からであります。

上海事件がありました後、野村海軍大將と植田陸軍大將、この二人が凱旋を致しまして御陪食仰付けられたことがありますが、御承知の通り野村大將は片目であるし、又植田大將は片足であります。拜謁に先だち　陛下は特に侍從を御召になつて、「あの二人は怪我をしてゐるから、何時何處で休息しても差支ない。形式に拘泥せずに無理のないやうにせよ」と有難き思召を傳へさせられたのであります。兩大將はそれを承つて御仁慈の程に深く感激致した次第であります。その他、在外使臣が歸朝して拜謁致します場合に於ても、よく在外臣民の狀況を詳細に御尋ねになります。異鄕に在るこれ等の臣民につきましてもいろいろ御軫念になりまして、確かアメリカ沿岸の何處でございましたか、在留民が病院を建てる企があるといふことが天聽に達しました時の如き、特にその

病院の爲に御下賜金を賜はつたこともあるのであります。

それから、　陛下の御質素であらせられますことにつき、一言申し上げたいと思ひます、御調度品は洗濯の出來るものは何回でも洗濯の上破れるまで御使用になります。それから又御調度品は殆ど總べて國産を御使用になるのでありますが、これは國産奬勵の思召からと拜するのであります。時計なども十五六圓の腕時計を御使用になつてをられます。クローム側の國産のものでありますが、よく合ふと仰せられて常にそれを御愛用になつておいでになります。それから一體に華美を御好み遊ばされず、萬事が御質素にあらせられるのであります。側近に奉仕致してをりますと、何とも仰せられませんけれども、不言の中に天下の華美を御戒めになつておいでなされるのではないかと常に恐懼致すのであります。それからこれは甚だ恐れ多いことでありますが、　陛下の御食事の御質素なことでありまして、これは世の中では相當誤解もありますから御話申し上げるのであります。勿論公式御陪食等の場合は別と致しまして、平日の御食事を拜見致しますと、朝は極く御質素なオートミールにハム・エッグスといふやうな極く簡單な御食事

のやうに拜します。それから晝晩の御食事は時々侍從長或は侍從なども御相伴を賜はることがありますが、所謂一汁三菜とでも申しますか、少しも餘計なものは附いてをりません。又御調度についても如何にも御質素で、常に　陛下から無駄を省けといふ御言葉を承つてをりました。無駄をしないやうに、無駄をするのは日本人の缺點だとまで仰せられたこともありまして、御自身は質素を御實行になつておいでになります。これは地方官に曾て達せられたことでありますが、宮中に書物とか寫眞帖とかを表裝を大變立派にして獻上になることがありますと、これは無駄のことであるから、これからは書物や寫眞帖の如きは本屋で配付するやうなもので宜しいから、よく內務省で地方官に達するやうにと仰せられたこともありまして、今はそれが實行されてゐる筈であります。さういふ風に萬事御質素で宮中で御節約になつた御費用は相當多額でありますが、　陛下はこれを學術研究や社會事業の御奬勵に皆御下賜になつておいでになるのであります。かういふことは宮內省の內々のことでありますから、脇では氣付かぬのでありませうけれども、事實內廷の御費用を御節し遊ばされまして、多分にさういふ方面に御振向けあら

せられでゐるのであります。

以上御仁德について申し上げましたが、まだ申し上げたい事は色々とございますけれども、この度はこれで終りたいと思ひます。平常側近に奉仕してをりますと、　陛下の思召が洵に深く感ぜられるのでありまして、御崇高の御態度を拜し屢〻敬虔の念に打たれるのであります。又いろいろの方面から拜察致しましても、　陛下の思召は、この國家は御自分御一人の國家ではない、皇祖皇宗から御繼承にならせられました國家であるといふ思召が非常に深いやうに拜せられるのであります。さうして、どうしたならばこの國家を立派に統治することが出來るか、又この金甌無缺の國家をどういふ風にして萬世に傳へて行くことが出來るか、又國民の幸福、所謂　陛下の最も愛せられますところの一切の臣民に對してどういふ風にすれば幸福を進めることが出來るか、この思召で日夜深く御軫念あらせられることを拜するのであります。その外には御自身の御都合といふやうなことは殆ど何にも御考へになつておいでにならぬのではないかと拜察致すのであります。如何にも洪大なる御聖德に感激措く能はざる次第であります。私の茲に申し

上げましたことは勿論御聖德の萬分の一に過ぎませぬが、これで終りたいと存じます。どうかわれら臣民一同協心戮力至誠以て至高至尊の聖慮に報い奉らんことを切望して止まぬ次第であります。

昭和十五年十二月十六日印刷
昭和十五年十二月二十日發行

非賣品

日本文化協會
發行者　理事長　菊池豐三郎

東京市豐島區西巢鴨二丁目二七一二
印刷者　山下謙之助

不許複製

東京市麴町區日比谷公園市政會館
發行所　日本文化協會
電話　銀座一一七四番
振替　東京七三九八七番

終